

## 追憶文

### 高見沢教授の長逝を悼む

藤 谷 謙 二

過ぐる五月七日の早暁、わが経済学部教授高見沢茂治君は、病状にわかにか革まり、近親の方々の手厚い看護もむなしく、ついに不帰の客となられた。教授が病を発して京大病院に入院されたのは、昨年十二月の中頃であった。意外な発病・入院の報に驚き、また難症とのことに憂を深くしながらも、われわれは、平素頑健をもつて鳴った教授が、よく病魔を克服して回春の域に達せられることを信じ、かつ祈ったのである。事実教授は二回にわたる大手術にも堪えられたのであり、献身的な看病と相俟って、治療は奏功するかに見えた。しかしわれわれの期待は空しく、近親知友の深い悲しみのうちに、ついに幽明境を異にするにいたった。いたましい限りである。

教授がわが学園に奉職されたのは、すでに古く昭和四年のことであり、中途一旦退職された期間があるとはいえ、その在職は前後二十三年余の長きにわたっている。特に経済学部に関係されるようになったのは、昭和二十四年以来であっ

て、英語並びに外国貿易実践を担当された。深い学殖と豊富な経験、加うるに円転滑脱、親しみ易い人柄は、多数の学生を惹きつけ、これに大きな感化を与えた。また交友の範囲は実に広く、多くの思い出を人々の胸裡にのこしている。われわれは教授がいつまでも健在で、わが学部並びに学園のために寄与されんことを期待していたのであるが、不幸にして病魔のため教授を喪うにいたったことは、かえすがえすも遺憾の極みである。

しかし教授がのこされた足跡は大きく、その影響力は深い。一たび訃報が伝わるや、来り吊するもの引きもきらず、悲しきうちにも盛んであったあの告別式の模様は、教授の遺徳を証して余りがある。もって冥すべしというべきか。ここに学会同人とともに、教授の在りし日を偲びつつ、謹んで哀悼の意を表する。

### 高見沢茂治教授を偲ぶ

井 上 次 郎

月日のたつのは洵に早い。高見沢教授が亡くなられてから、はや三月。だが、今に、例の微笑を浮べてひょっこりと眼の前に現れてくるような気がしてならないのだ。

高見沢教授と立命館とのつながりは古い。昭和四年に立教

大学商学部を卒業し、同年四月立命館中学の教諭として赴任されたのがその始まりである。きわめて熱心な英語の青年教師として、腕白坊主を震えあがらせたものだった。私が教授を知るようになったのは、氏が立命館大学高等商業部教授として広小路学舎で教鞭を採られることになった、昭和十年以降のことである。和田三良、杉栄君等を介して知遇を辱うするようになったかに記憶している。

高見沢教授は、教えることにかけては非常に厳格であったが、その反面、情誼に厚く、己を忘れて後輩や教子の世話をし、あとあとまでの面倒をみるといふきわめて人情味の豊かな人であった。だから、その厳格さも、教子のためを思う情熱のほとばしりであることが相手によく感得されるので、その叱声を徳とこそ思え、これを恨む者は一人としていなかった。これは、云うべくしてなかなか真似のできないことであつて、氏がいかに優れた教育者であつたかを示すものである。

高見沢教授が、正規の授業を担当するかわら、多年にわたつて、体育会相撲部の部長として、はたまた学術部E・S・S、貿易研究会等の顧問として、部の向上発展、会員の指導誘掖にいかにも尽瘁されたかは、知る人ぞ知る。氏の計報を伝え聞いて、深い哀愁に包まれつつ中間にはせ參ずる卒業生、在學生が、文字通り踵を接し、私は子弟の情愛のうるわしさに強く心を打たれると共に、教授の尽力に対して深い敬

意を覚えずにはいられなかつた。

高見沢教授は、商業英語の権威者として、学界に重きをなしておられた。また商学部の出身者であつただけ貿易問題の研究にも興味をもたれ、その方面の造詣もなかなか深かつた。私は、教授がその貴重は研究成果を公にされることに、大きな期待をかけていたのであるが、遽に二醫の冒すところとなり、瀆罵としてこの世を去られたことは、まことに惜しみても余りのあることである。

食道癌らしいという診断が下された時、教授が氣を挫くことを懸念し、周囲の者としてはそのまま伝えたくもなかうかについていろいろと苦慮を重ねたのであるが、当の御本人は早くもこれを感じされ、京大病院に入院の前日、わざわざ学校に見え、「どうも、癌らしいので、これから京大病院に入院して徹底的にしらべてもらう積りである。ついでには、学校の方はよろしくお頼みする」と挨拶されたが、心の翳りも動揺も全く見られず、その間終始微笑を浮べ、おだやかな口調で、まるで他人事のように述べられたのには、却てこちらが身の凍る想をし、教授の顔を正視することができなかつたほどである。教授は信州人特有のシンの強さをもつておられたが、生死の巖頭に立つてもいささかも動ずることなく、泰然自若、平素と全く異なるところのなかつたことは、真に敬服に堪えない。

その後数回大手術を受けられたが、御本人は既に全く死生

を超絶し、愚痴や穢言はついで述べられたことはなく、澄みきった境地にあって病状について淡々として語られるのは、凡愚の身として聞く方がつらく、はては病院にお伺いしても、病室の前を素通りして、主治医にだけ会って最善の治療と看護をお願いして引下ったこともある位である。

教授は酒を嗜まれ、その方面の逸話も多かった人であるが、酒の醍醐味を解さない不粋な私にはこれについて語る資格は全くない。

高見沢教授を追憶し、所懐の一端を述べ、追悼の辞とする次第である。

## 高見沢先生の思い出

岡 橋 祐

高見沢先生は去る五月に急逝された。四月末に退院されたことを聞いたので一度御見舞にと思つている間に御逝去の報に接したわけで、まことに心残りのことであつた。もつとも御入院中には数回御見舞をし、御病状の一進一退の模様に一喜一憂しつつも、一日も早く恢復されることを祈っていたわけであつたが、こうも急に逝去されるとは夢にも思つていなかった。御入院中は教授会(特に人事の)のことを非常に気にして居られたので、出来る限り御報告申し上げるようにし

また先生の御意見を取りつくだこともあつた。

私と高見沢先生との交友は約十年位続いた。同じ英語の教師とは言え、先生は商業英語が御専門であつて私の専門とする所とはあまりにかけ離れていたもので、専門上の点ではまるで交渉がなかつたが、同じ教養の英語を担当している関係上、いろいろ御相談もし、御教示を仰いだ。殊に先生は大学に於ける在任年限が私などに比較して遙かに長く、豊富な経験を持たれていたもので、有益な御指示を受けたこともしばしばあつた。

先生は教養の英語と貿易実務とを担当せられていた。そして毎年の商業英語学会には欠かさず出席されて研究を続けられた。また、一般教育研究協議会にもしばしば出席されて、学部のために種々つくされる所があつた。

先生は人の世話をよくせられた。これは多くの人の知る所であり、先生の御世話で就職出来た学生も沢山いる筈である。私も亦、先生の御世話を受けた一人であるが、これはよき思い出として常に感謝している点である。

先生は外向性の明るい性質で、誰とでも隔てなく交際された。葬儀の際に於ける見送人の数の多さと、その多種多様であつたことが、よくこのことを証明していると思う。

先生は酒を非常にたしなまれた。もし私が酒が好きであつたら、そして酒呑みの気持に同調することが出来たら、私達の仲はもっと深いものになつたであらうにと、私の酒をよせ

つけない体質を残念に思ったこともある。

今、この簡単な思い出の記を綴りつつ、追悼の念を新たに  
し、先生の御冥福を心から祈る次第である。

(昭和三年八月五日)

## 追 憶

宇 都 宮 巖

高見沢先生に対する追憶としては、先ず第一に、共に寮に  
居た頃のこと、が浮んで来ます。

何しろ創立以来「自由の学府」を特色として又スクール・  
カラーとしていたからか、寮の門限なども、あったのかどう  
か誰も知らぬ有様。

先生の交有範囲は、清濁併せ呑む性格からか、実に広範囲  
に亘っていました。特に今猶印象に鮮かなのは、夜分附近の  
飲み屋で相当飲んだ後、数名のグループで、屢々、深夜でも、  
東寮の舎監室を振り出しに、三味線をひく者や、「はい、今  
晩は」などと、各室のドアをノックして、睡眠中の寮生を起  
して廻る者や、戦前の「大陽族」的な感がありました。唯感  
心した事は、皆翌日になると、制服をつけ、礼儀正しく、授  
業にも出るし、学内活動も積極的に推進する点が、戦後の  
「大陽族」との違う点でした。

然し、此の間に、将来、悉ゆる種類の人々と、未知の人々  
とでも、一見旧知の如くに、親しく交際出来る大切な修業が  
積まれた訳でした。

其社交性は英語会(ESS)に於いても充分に發揮され、  
日本英語聯盟の委員に選出され、大いに活躍された。

先生が折に触れて度々漏らされた僕への在学中の印象とし  
ては、「我々がいい気持になって、飲み屋から寮へ帰ると、  
毎晩の様に、唯一つ西寮の二階の北端の室丈が——註、宇都  
宮の室の窓丈が——電燈が明るいので、印象に残っていた」  
事だったらしく色んな折に話された。

之は、僕の性格が、孤独を好み、従って非社交的で、勉強  
のプランを遂行するために、深夜起床し、夜を徹して読書す  
る習慣でしたから、先生のグループには苦手の存在だったか  
と思います。——そして僕が当時「スト」を断行した——  
又最後迄頑張った中心分子の一人だった事も、秘密のアチト  
として僕の部屋が謀議の場所になっていた事も、戦前の「赤  
い学生」だった事も、先生は承知の上で、性格も、先生の所  
謂「水と油」程違っても、実の兄以上に温く包容して頂い  
た。

次に想い出すことは、先生が卒業されて立命館中学教諭と  
して京都に定住された直後のことです。

もう記憶が不確かになりましたが、多分、上賀茂の方で、  
賀茂川の堤防の近くの、市営住宅で、新婚当時の事でした。

未だ在学中だった僕は、東京から帰省の途中で、京都に下車して、先輩に「敬意を表す」為新家庭を訪問し、泊めて頂いた。

先生は、立命館商業の創設と共に商業英語を教えられ、当時の校長中西先生に紹介されたり、英語の田中先生（現在の三浦先生）にも紹介された。

今考えると、先生は、何れ卒業後、英文科出身者として、英語の教員として、立命館商業の関係者に紹介して、就職への第一工作として頂いたのではなかったかと思ひ、当る点もありますが、先生の後輩に対する温かい配慮は、この様な何気ない紹介の仕方のうちにも、しみじみとしたものを感じるのです。

後輩に対する先輩としての温かい配慮の一例を挙げますれば、立命館商業へ僕を推薦される時、何も知らずに僕は親戚の者がやっていた貿易商社に勤務していましたが、第一回目に推薦して頂いた折は、余儀なき事情で辞退しましたがにも拘らず、一カ月経つか経たぬかで、再度、友情溢るる御勧誘を受け、感激して、立命館に赴任する事となったのですが、後になって詳しい話を聞いて、一層感銘深く、終生忘れ得ない一事は、僕は履歴書も何も提出して居なかつたのですが、先生が自ら筆をとって僕の履歴書迄書いて提出して頂いたとの事、仲々斯様な熱心な世話は、言うべくして行い難いものである丈に、僕の受けた印象は誠に強く、昔風の教育を受けて

育った僕は、「己を知る者のために死す」という程の感銘を受けた次第です。この感激の為に、立命館に在職する限り、先生に対するこの感謝の気持を、終生忘却してはならないと、私かに心に誓ひ、如何なる場合にも、先輩であり、恩人であり、実の兄以上に仰ぎ仕えて来た積りです。

終戦後、立命館大学の予科教授として再び教壇に立たれて間もなくでした。学生諸君から英語会結成の相談を受けられ、色々と親身になって相談相手になったり、指導をされたりして居られた頃、僕は旧友R・S・アンダーソン（現ミシガン大学教授）の依頼で、一時立命館を去って居ましたが、勤務の余暇に時折英語会に出席して、先生やメンバーの学生諸君と楽しく語り合いました。

又、学生時代に、他の大学のメンバーと交わる事により、終生励まし合う親友が得られたり、学習意欲に対する貴重な刺戟を受けたたりした事を想起し、立教E S S が同志社E S S と戦前からの交歓を続けていたのを、立命館E S S ともリンクし、数年前から、毎年の様に、初夏と中秋とに、京都と東京で交互にミーティングを開催し、戦後の立命館E S S の水準を高めるのに、好機会を与えられたのも先生に負う所が少なくなかつたと思います。勿論、其の間、諸先生方の御尽力は申す迄ありませんが、之と関連して、この機会に一言触れさせて頂き度いのは、――と申すのは、もう先生が故人となられ、他に詳しい事情を知らされた方もないのではないかと

案じますので——実はM君（同君の爲めに唯M君とわざと頭文字文にして置き度い）を後輩として、立命館大学の英語教員として推薦し度いが、同意し推薦して欲しいと相談を受けた時、又先生の清濁併せ呑む性格から、M君の失職に同情され、推薦される心境が僕にも解るので、僕も一抹の懸念を感じ乍らも、最後に同調したのですが、そして最初の一年間位は、M君も恐らく先輩高見沢教授の温い友情に感激していた様子で、仲よく協力出来ていたのですが、丁度新学年の打合せの折に、当時は先生と僕とM君の三人丈でしたので、先生は自宅で寒い折でもあり、スキ焼の用意迄して、M君を数時間待たれたが、遂に何の連絡もなく、空しく待たされた上、打合せの大事な用件も目的が達せられなかった事がありました。

後で教務課でM君に出会って、先生が理由を質されたら、「バスケット部の合宿へ行ってたから」と木で鼻くつつた様な返事だったので、「何故知らせて呉れなかったか」と注意されたら、其後「人中で恥をかかせた」とM君が先生を逆恨みし出したらしく、学校で出会ってもろくに挨拶もしないと、先生も憤慨したり、注意されたり、何回否何十回となく、同じ様な話を聞かされたのですが、僕は最初から、一抹の不安を抱いていたので、余り多くの期待もなかった為めか、大して失望もなく、むしろ傍観の立場に在ったが、偶々、先生と親しくしたので、M君から敵視されていたのか、偶然の

機会に、——或はM君はそんな機会を待ってたかも知れなかったが——授業時間が終つても長い間寒い廊下で大勢の学生を待たし、遂に次の授業時間が初まっても、依然として出席の爲めの個人点呼が長々と続くので、注意した途端、物凄いい見幕で逆襲的に且つ感情的な放言となり、一ト言ニタ言応答した事が誇大に紙上に伝えられ、不快な且つ面目ない仕儀となり、僕は不徳を恥じ、何れ機会が与えられる折に釈明させて頂く積りで、沈黙を守る事としたのに、M君は全く狂気の様になり、第三者に何か吹聴していた様に見受けられたが、僕は唯沈黙を守りました。この時高見沢教授は、いつも僕に語られた事は、「君に済まなかった、最初から僕がM君を見る明がなかった。つい彼の失業に同情して、失業する事情を充分調べなかった点が手落ちだった」と何度も何度も謝られた。又「僕が彦根へ当日行っていなかったら、僕が屹度M君をもっともつと強い言葉で注意してたろう。君には全く済まなかった。」と繰返し謝られた。僕はこれを、唯先生の僕に対する先輩としての注意且つ激励として、感謝して拝聴した次第です。

最後に、最も深い印象を受けたのは、先生が食道癌で入院される前後、及び、死の寸前迄、立派な態度だった事です。確か昨年十二月初旬でした。教授会に出席しようとしていたら、医務局から呼ばれました。「実は、あなたが高見沢教授と最も親しいので」と前置されて言われたのは、先生が食

道癌である事と先生の奥様への伝言、病名は本人は勿論他の如何なる人々にも内密にする事等、注意されました。急用がありましたのと先生の自宅では他の人々に知れると案じて、高見沢夫人には京都駅迄御足勞願つて、駅で伝言通りに申しましたら、言下に「癌ということは何故本人に言つてはならないか」「言わないと本人の酒癖も治らない」と申されたので、「兎も角も、入院の件もあり、医者に会つて頂き度い、それ迄は他言は御無用に願います」と頼んで別れたのでした。所が翌朝研究室で先生にお目にかかる、一寸沈んだ様な語調で、「君にはいつも気を遣わして済まん」としみじみした調子で話をされたので、内心「或いは奥さんから聞かれたか」と案じ乍ら、其の日の昼休みに、診療所の方に確かめますと、「今朝奥さんが来られて皆本人に話した」との事で弱つたと言われ、早速引返えして、先生と共に診療所へ戻り入院の打合せ等をしました。この時の先生の態度は実に落ち着いた冷靜なもので敬服しました。

殊に、鮮かに印象に残っているのは、五月三日、名古屋へ日本教育学会に出席する朝早く、御見舞に参りました折、四日の土曜日から教壇に立つて頑張つて居られたのですが、猶お熱が少しあったので、せめて今一度丈休まれて、次週にして頂く様に強くお願いして、別れました。至極お元氣そうでしたので、六日（月曜日）学校へ先に参り、帰りにお見舞する積りでしたら、武藤主事から先生の御容態の急変を聞き、

初めは耳を疑つた位でしたが、御一緒に御見舞に参りましたら、全く数日前とは別人の様に弱つて居られ一驚しました。「藤谷部長が御見舞に来て下さいました。」と申しました時、死の直前の先生が、衰弱したからだを正した上、病床から降りて挨拶に出ようとされ、びつくりしました。

追憶は次から次と尽きませんが、拙い文章で貴重なスペースを汚さぬ様之で擱筆致します。

（一九五七・八・一二）

## 追 憶

高橋喜久夫

私が高見沢先生と始めて逢つたのは、立命へ転動する私の身元調査に前任校へ来られた昭和三十年の早春であった。

あれから二年有余——私が何時の頃からどのようにして先生と馴染みになったのか、妙に記憶が薄れている。担当科目が同じとは云え、専攻は全く違ふし、年令から云つても父子程離れている先生と私が、何年来の友人同志のように親しく附合うようになったのは、酒が取持つ縁であった。私は昔からよく遊びよく遊べ主義（遊びの方は近年余り守っていないが）であり、先生と斯面に於て興味が一致したのではないかと思う。加えて、先生の夜の講義日時が私のそれと二日も同

一であった年が二年も続いたし、先生の研究室は私の真向いであつたことが、夜の清遊の機会を屢々作つた。

「喜久夫さん、いるか？」夜三限が終つてほつと一息ついてると、先生は何時もなくクされた。先生の部屋へ入ると大抵サントリーの角びんが私を待っていた。二杯三杯とグラスを傾け一日の疲労が次第に血管を流れていくにつれ、私たち酒徒のロマンチズム「山のあなたへの憧憬」はつのもり、一時間もすれば私たちはよく木屋町筋の飲み屋で本格的に腰を据えていたものである。意気は益々軒昂、梯子は通常三、四軒に及ぶのが常である。

飲んでおられる時の先生ほど天真爛漫な姿はない。秘密も偽りも真も何の隠しもなく豪声で話される。様々の唄も飛出すが、相当メーターが上るときまつて「酒は飲むべし茶釜でわかせ……」の連発になり、声は益々あたりに響きわたる。私はいつしか学生時代のすさまじい元氣旺盛なそれでいて健康なドンチャンコンパを想い、先生が懐しい学友であるかのような錯覚を起してしまふ。自意識過剰でとりすまして時々毒舌を浴びせる嫌な種類の酒徒に比べて、何とあつさりした豪快な酒であろう。深酒の時に必らず傘か靴をお忘れになる癖は、人のいい先生の性格の一端を表わしているのではあるまいか。「閑居して不善もできぬ小人は、酒壺を手にすべからず。」先生と飲んで、私はこんなことを覚えたようである。お人がよい性格の持主が殆んどそうであるように、先生は

心のやさしい暖かみの豊かな人であつた。今日はいいい紅茶があるからと、昼食時に研究室へ呼んでもらつたことは何十回だつたらう。入ると先客が既に一人二人とあるのが屢々で、先生は自ら茶を入れ砂糖加減までして出された。自ら召上られるパンやチーズもよく進められた。人を招いて休憩時の寛ろぎを楽しんでおられる先生の顔の何と嬉しうであつたことよ。

昨年の夏休み、近くへ来たのでと云うので、「喜久夫さんビールを飲まんか。」とわかりにくい私の家へ誘いに寄られ、千木の喫茶店で暑い午後を過したこともある。昨年結婚するまで私は老母と二人きりで住んでいたのも、夜更けの帰宅をできるだけだけさけていたが、先生は何時しかこれを知られ、飲み歩いて夜の十二時頃になつても尙私の「山のあなた」への郷愁が静まらぬ時には、「お母さんが心配する、もう帰りなさい。」とタクシーを止めて私を押込められたことは、一度や二度ではない。

先生の酒を悪く云う人がある。私はそうは思わない。悪酒と云う人は下戸の方ではなからうか。したたか飲んで夜の街を闊歩する時(千鳥足でも当人にとっては堂々たる闊歩である)、少くとも私にとつて人間は皆平等になる。人間の平等は小学六年生でも知っているが、今日社会に於て誰が実践しているだろうか。榮達・虚栄・自惚・卑屈等がそれを阻止するのである。処が飲んだ時にはそうした悪徳は一切姿を消



し、人の上には人ではなく人の下には人ではなくなり、えらいお方にも乞食にも、「おい、貴様。」となる。淡々たる友情と善意があるばかりで、文字通り天衣無縫の姿である。飲むと言葉が荒くなると責める人があるけれども、そういう人は酔境の *returning to nature* を知らない人である。ましてこのような無垢の境地から敵意を起させるべく誘導する人は、何と興覚めも甚しいことであろうか。先生の酒が悪いと云う人に対する私の正論的弁護である。

このように書いてくると、先生は朗らかで明るい人のように思えるが、決してこれが先生の本姿ではない。二年に余る短かい間のことであるから、正確に把握できたわけではないが、先生にどこか寂しさがあることが気になり始めたのは、先生と飲み廻り出して間もない頃であったと思う。一諸にと誘われてお断りした時、梯子の途中で私がひきあげる時など「そう、じゃ帰れ。」と怒ったように云ってさっさと行かれるが、その一瞬に見える顔色はまさに孤独者のそれである。先生が人を招き、酒を共に飲み、豪快に騒ごうとされるのも、人恋しさそのものからであり、その孤独感から先生独自のヒューマニズムが生れて来るように思う。先生程の年で先生程正直で無垢な人は滅多にないであろう。

私は先生の孤独な裏面に惹かれていたのかも知れない。しかしそれが何であるかを知る前に、私は先生と永遠に別れてしまった。今にして思えば、それを知ろうとする必要もなかつた。

つたような気もする。私自身飲んでいて時折ふと感じ、  
「人間の孤独」に似たあの名状しがたい寂しさであったかも知れないからだ。

先生逝かれて早三月。

それにしても、「喜久夫さん、いるか。」と夜更けの研究室をノックされるあの音を、今だに私が時折じつと耳を澄まして待つのは、なぜであろうか。